

【熊本S. J. C. D. 例会 抄録】

演 題 **Functionally Discluded Occlusion**

演者名 三村彰吾

日 付 2012年11月27日

keywords

1. 咬合再構成
2. インプラント
3. Functionally Discluded Occlusion

抄 録

現在、教科書的に咬合様式は 平衡側でも接触滑走させるフルバランスドオクルージョンと平衡側では接触させないグループファンクションドオクルージョンと作業側は犬歯のみに接触滑走させるミューチュアリープロテクテッドオクルージョンがある。元来SJCDでは、ミューチュアリープロテクテッドオクルージョンが咀嚼筋の負担において都合が良いとされている。しかし、その場合、臼歯部はどのくらいディスクルージョンさせたらよいかということは、どこにもうたわれてなく、実際の臨床では、個々の歯科医師、歯科技工士の考え方や技量で行われている。

私はそれを客観的に患者の口腔内で構築できる Functionally Discluded Occlusionという咬合様式を桑田正博先生から教えていただきました。この咬合様式は、側方運動時における上下顎歯の接触滑走は作業側の犬歯に求め、下顎臼歯の頬側機能咬頭切縁と上顎臼歯作業側内斜面との、機能的な接近度合いを、咀嚼ストロークの範囲内で適切に計画するとともに、非作業側においては、上下顎臼歯非作業側内斜面と対合する咬頭との機能的な離開度合いをケース固有の角度によって、適切に計画するというものです。

今回、私が実際に患者の口腔内で行った症例を発表させていただきます。

患者は、61歳女性、初診日は2008年の8月1日です。上顎ブリッジの動揺が主訴で来院されました。全身的な既往は特にありません。初期治療後、下顎の前歯部の矯正を行い、最終的にFGPテクニックを用いて作業側臼歯部を機能的に接近させて、また非作業側を機能的に離開させる咬合を構築しました。

皆様のご意見、ご指導をよろしくお願い申し上げます。